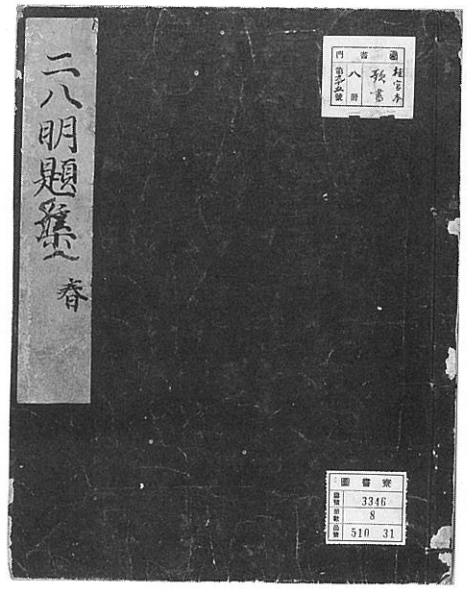

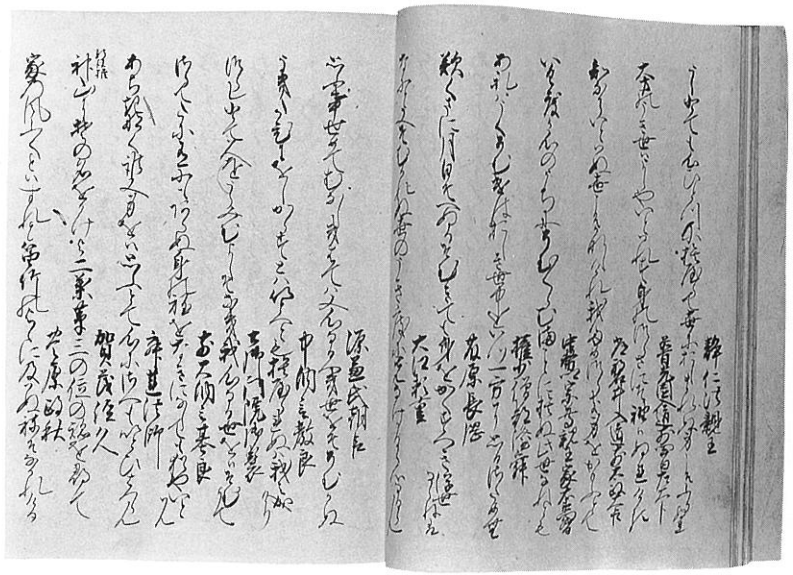

二八明題和歌集（宮内庁書陵部）

目　次

一　賀茂大社と賀茂族……一
賀茂氏系譜……二四
鴨氏系譜……二七
二　賀茂大社と斎院……二八
1　賀茂斎院の起原、目的……二八
2　文学に貢献した四斎院について……四一
(一)　有智子内親王……四一
(二)　大斎院選子内親王……四三
(三)　禖子内親王……四九
(四)　式子内親王……五三
三　賀茂と和歌……五七
1　賀茂和歌の時代別分布……五七
2　自然的素材の時代別分布……六三
(一)　自然現象……六四
(1)　月……六四
(あ)　平安時代……六五
(い)　鎌倉時代……六八
(う)　南北朝時代……七三
(え)　室町時代……七三
(2)　風……七五
(あ)　平安時代……七六
(い)　鎌倉時代……七六

賀茂氏の歌人群
(う) 室町時代……七九
(3) 雪……八〇
(あ) 平安時代……八〇
(い) 鎌倉時代……八〇
(う) 室町時代……八二
(4) 霞……八三
(あ) 平安時代……八三
(い) 鎌倉時代……八三
(う) 室町時代……八四
(5) 霧……八四
(あ) 平安時代……八四
(い) 鎌倉時代……八五
(う) 室町時代……八五
(6) 霜……八六
(あ) 平安時代……八六
(い) 鎌倉時代……八六
(う) 南北朝時代……八七
(え) 室町時代……八八
(7) 露……八八
(あ) 平安時代……八八
(い) 鎌倉時代……八九
(う) 南北朝時代……八九
(え) 室町時代……八九
(8) 雲……九二
(あ) 平安時代……九二
(い) 鎌倉時代……九三
(う) 室町時代……九三
(9) 時雨……九四
(あ) 平安時代……九四
(い) 鎌倉時代……九五
(う) 室町時代……九七
(10) 氷……九五
(あ) 平安時代……九六
(い) 鎌倉時代……九六
(う) 室町時代……九七

(二) 植物……九八
(1) 葵……九八
(あ) 平安時代……一〇一
(A) 賀茂明神の象徴……一〇一
(B) 述懐……一〇三
(C) 恋愛……一〇四
(D) 友情……一〇六
(E) 哀傷……一〇七
(F) 神仏混淆……一〇八
(い) 鎌倉時代……一〇九
(A) 賀茂明神の象徴……一〇九
(B) 述懐……一一〇
(C) 恋愛……一一三
(D) 友情……一一三
(E) 哀傷……一一四
(F) 時代相……一一五
(G) 葵祭の景趣……一一六
(う) 南北朝時代……一一七
(A) 賀茂明神の象徴……一一七
(B) 述懐……一一八
(C) 恋愛……一一八
(D) 葵祭の景趣……一一八
(え) 室町時代……一一九
(A) 賀茂明神の象徴……一一九
(B) 述懐……一二一
(C) 恋愛……一二三
(D) 時代相……一二三
(E) 葵祭の景趣……一二四
(2) その他の植物……一二六
(あ) 平安時代……一二七
(A) 神聖……一二七
(B) 述懐……一二八
(C) 恋……一二九
(D) 景趣……一三〇
(い) 鎌倉時代……一三〇
(A) 神聖……一三一
(B) 述懐……一三三

賀茂氏の歌人群
(C) 景趣……一三三
(う) 南北朝時代……一三三
(え) 室町時代……一三四
(A) 神聖……一三四
(B) 述懐……一三五
(C) 恋……一三六
(D) 景趣……一三六
(三) 賀茂和歌と動物……一三七
(あ) 平安時代……一三八
(A) 神聖……一三八
(B) 述懐……一三九
(C) 情愛……一四〇
(D) 景趣……一四一
(い) 鎌倉時代……一四三
(A) 神聖……一四三
(B) 述懐……一四四
(C) 待望……一四五
(D) 景趣……一四六
(う) 南北朝時代……一四八
(え) 室町時代……一四九
(A) 神聖……一四九
(B) 待望……一五〇
(C) 景趣……一五一
(四) 和歌の名所としての賀茂……一五三
(1) 歌人達による「名所」(表示一)……一五三
(2) 「神山、加茂川」に関係深い「名所」(表示二)……一五五
(あ) 平安時代……一五五
(A) 神聖……一五五
(B) 述懐……一五六
(C) 恋……一五七
(D) 景趣……一五八
(E) 雑……一六〇
(い) 鎌倉時代……一六三
(A) 神聖……一六三
(B) 述懐……一六四
(C) 恋……一六六

(D) 景趣……一六七
(E) 雑……一六八
(う) 南北朝時代……一六九
(A) 神聖……一六九
(B) 述懐……一七〇
(C) 景趣……一七一
(D) 雑……一七一
(え) 室町時代……一七一
(A) 神聖……一七一
(B) 述懐……一七四
(C) 恋……一七五
(D) 景趣……一七六
(E) 雑……一七八
(3) 「糺の杜」に関係深い「名所」(表示三)……一七八
(あ) 平安時代……一七九
(A) 恋……一七九
(B) 景趣……一八〇
(C) 雑……一八〇
(い) 鎌倉時代……一八一
(A) 神聖……一八一
(B) 述懐……一八二
(C) 景趣……一八三
(D) 雑……一八三
(う) 南北朝時代……一八四
(A) 恋……一八四
(B) 雑……一八五
(え) 室町時代……一八五
(A) 神聖……一八五
(B) 恋……一八六
(C) 景趣……一八六

四 賀茂と歌人……一八八

1 平安時代……一八八
(一) 賀茂詣……一八八
(あ) 花山たつぬる中納言……一八八
(い) さまざまの悦び……一八九
(う) はつ花……一八九
(え) はつ花……一九〇

賀茂氏の歌人群
(お) はつ花……一九〇
(か) ゆふして……一九一
(き) 衣の珠……一九二
(二) 神仏混淆……一九三
(あ) 相模……一九三
(い) 成尋阿闍梨母……一九三
(う) 賀茂重保……一九四
(え) 皇太后宮大進……一九四
(お) 肥後……一九四
(三) 恋……一九五
(あ) よみ人しらす……一九五
(い) 祭主大中臣輔親……一九五
(う) 藤原元真……一九五
(え) 源順……一九五
(お) 馬内侍……一九五
(か) 読人しらす……一九六
(き) 馬内侍……一九六
(く) 和泉式部……一九六
(け) 平定文……一九六
(こ) 海人手古良……一九六
(さ) 藤原家経……一九六
(し) 大納言実家……一九七
(四) 機智……一九七
(あ) 神主忠頼……一九七
(い) よしまさ……一九八
(う) 加賀左衛門命婦……一九八
(五) 憂世……一九九
(あ) 藤原顕輔……一九九
(い) 周防内侍……一九九
(う) 賀茂成助……一九九
(え) 成尋阿闍梨母……二〇〇
(お) 法印静賢……二〇〇
(か) 正三位藤原季経……二〇〇
2 鎌倉時代……二〇一
(一) 西行法師……二〇三
(二) 藤原俊成……二〇五
(あ) 俊成卿文治六年五社百首……二〇六
(い) 長秋詠藻……二〇六

(う) 玉葉和歌集……二〇六
(三) 大僧正慈円……二〇八
(あ) 世相の憂慮……二〇九
(い) 長年の信仰の功徳……二〇九
(う) 神道の尊厳……二一〇
(え) 肉親への追慕……二一〇
(お) 景趣からの人生観……二一一
(か) 恋歌……二一三
(四) 藤原定家……二一三
(五) 如願法師……二一五
(六) 後鳥羽院……二一六
(七) 宗尊親王……二一六
(八) 亀山院……二一七
(九) 一般歌人の詠出歌……二一八
(あ) 述懐歌……二一八
(い) 神への祈願歌……二一三
(う) 神恵への感謝歌……二一四
(え) 恋歌……二一五
3 南北朝時代……二一六
(一) 神への祈願歌……二一六
(二) 恋歌……二一八
4 室町時代……二一九
(一) 神への祈願歌……二一九
(二) 恋歌……二二三
五 勅撰和歌集と賀茂歌人……二二四
六 賀茂成助の伝記……二四〇
七 賀茂重保の伝記……二四六
八 賀茂氏久の伝記……二五三
1 氏久の系図……二五三
2 氏久の生涯……二五六
九 賀茂幸平以下十神主の伝記……二六一

賀茂氏の歌人群
十　賀茂氏歌人群の歌風……二六八
1　詠法の問題……二六九
(一)　題詠歌……二六九
題詠……二七〇
(二)　字余歌……二七一
字余……二七一
(三)　句切……二七二
一句切……二七二
二句切……二七三
三句切……二七三
四句切……二七四
五句切……二七四
体言止……二七五
(四)　修辞……二七六
序詞……二七六
枕詞……二七七
掛詞……二七七
縁語……二七八
比喩……二七九
擬人法……二七九
倒置法……二八〇
対語……二八〇
同語反覆……二八〇
(五)　本歌取……二八一
本歌取……二八一
2　詠歌内容の問題……二八五
(一)　神祇歌……二八五
(1)　憂国、忠誠、信頼の歌……二九一
(2)　神恵、信頼、平和の歌……二九三
(3)　神聖なる景色……二九五
(二)　憂愁歌……二九七

(三)　恋歌……三〇一
(1)　題詠歌……三〇三
(2)　題知らず……三〇四
(3)　恋の歌の中に……三〇六
(四)　四季歌……三〇八
(1)　春の歌……三〇八
(A)　自然歌……三〇八
(2)　春の歌……三一〇
(B)　自然と人生歌……三一〇
(3)　夏の歌……三一一
(A)　自然歌……三一一
(4)　夏の歌……三一三
(B)　自然と人生歌……三一三
(5)　秋の歌……三一三
(A)　自然歌……三一三
(6)　秋の歌……三一四
(B)　自然と人生歌……三一四
(7)　冬の歌……三一五
(A)　自然歌……三一五
(8)　冬の歌……三一六
(B)　自然と人生歌……三一六
(五)　述懐……三一九
(六)　羇旅歌……三二〇
(七)　友情歌……三二一
(八)　哀傷歌……三二三
(九)　釈教歌……三二四
(十)　雑歌……三二四
付　賀茂氏歌人別作歌一覧……三二七
賀茂成助―作歌三十三首、連歌一句……三二七
賀茂重保―作歌五十五首……三三四
賀茂氏久―作歌四十首……三四四
賀茂幸平―作歌三首……三五一

賀茂重政―作歌十首……三五三
賀茂景久―作歌二首……三五四
賀茂久世―作歌八首……三五四
賀茂遠久―作歌六首……三五六
賀茂信久―作歌一首……三五八
賀茂経久―作歌十首……三五八
賀茂久宗―作歌二首……三六〇
賀茂教久―作歌三首……三六一
賀茂雅久―作歌六首……三六三
結び……三六四
学苑掲載論文一覧……三六八
単行本……三七三
初句索引……三七三
人名索引……三八一

一　賀茂大社と賀茂族

「賀茂注進雑記」（続々群書類従第一巻　賀茂社家篇）の冒頭文に「賀茂皇太神宮の本縁は昔より一社の深秘にて社家の中にも信機にあらざれば浅略の儀を傳へて相承の奥儀をゆるし傳る事なし況や他授に及び外に傳る事あらず候へば今以あらはに筆舌に難し述候しかはあれど社家の文書所見の趣あらまし要を摘て注進つかうまつり候此等の事は世間流布の書籍にも歴覧あるべく候歟或神書に云天地未分まろかれたる中に大もとの御神ましまし清るは天となり濁れるはくだりて地と成しより陰陽の両神わかれまし〳〵て陽徳の御神は天の事をつかさどり陰徳の御神は国土をしろしめすといへり又云当社の託し給へる神詠に

ちはやふるわけつち山に宮居して天くたること神代よりさき

と託し給つると（一本無託以下六字）みえたり同私記に賀茂御神は陰徳にて男神伊勢は陽徳にてしかも女神に坐す天地陰陽両神相対の御神徳霊験いちじるしくおはしまし伊勢に内外賀茂に上下の両社たゝせ給ふ深秘不可説の口決ども難し筆相承の傳を受べしと云々」とあり、伴信友著『瀬見小河』の序文には、「賀茂の大神たちは、皇都を近くて守らせたまふやむごとなき大神にしおはしますを、いかなればにか、史どもに其古事を記しもらされたるにあはせて、はやくよりまぎらはしく聞え給へる事の多かる中に、いとあるまじきかたに申しなせることさへもきこゆるを、おのれはやくより、古記どもの中に、此神たちの御上にかゝれる古事を、見あたりたるかぎり、何くれと書つめおきつるを、こたび取出てさらに考證して、書つらねて見むとす。そも〳〵中昔よりの世のみだれに、神の御社のあれはてゝ、其跡所だにさ

二　賀茂大社と斎院

1　賀茂斎院の起原、目的

賀茂大社の概説に次いで説明の必要なのは、賀茂斎院についてである。

賀茂斎院にふれる前に、その原拠である伊勢斎宮について一言しなければならない。伊勢斎宮の起原、目的は、『日本書紀』第五崇神天皇五年と六年の条に

「五年、国内多二疾疫一。民有二死亡者一。且大半矣。六年、百姓流離。或有二背叛一。其勢難二以レ徳治一レ之。是以、晨興夕惕。請二罪神祇一。先レ是、天照大神、倭大国魂二神、並二祭於天皇大殿之内一。然畏二其神勢一。共住不レ安。故以二天照大神一。託二豊鍬入姫命一。祭二於倭笠縫邑一。仍立二磯堅城神籬一（神籬此云二比莽呂岐一）。亦以二日本大国魂神一。託二渟名城入姫命一。令レ祭云々」

の記事がある。これによると、伊勢斎宮の起原は崇神天皇五年、疫病流行のために、人民の大半が死亡する凶事が起り、その猖獗の様は、翌六年になっても衰えず、百姓の流離、背反する者多く、もはや、朝廷の徳政では治める事が困難となり、皇国の御祖神の天照大神の御意を豊鍬入姫命に託されて、倭国笠縫邑に奉斎させたことで、その目的は、疫病流行の人為では不可能な窮地を神力をかりて救済せんとする方法、即ち人間社会を苦難から救う一方法であったらしい。

賀茂斎院の起原、目的について、『古事類苑』神祇部六十四賀茂神社四斎院についての項に

「初メ嵯峨天皇ノ朝、平城上皇復祚ヲ図リ給フニ由リ、天皇密ニ賀茂大神ニ御祈願アリテ、皇女ヲ以テ、承事セシメント誓ヒ給ヒ、事平ギテ後、弘仁元年四月、皇女有智子内親王ヲシテ、恒ニ潔斎奉祀セシム。斎院蓋シ此ニ始マル」

『本朝月令』に、

「又説云。嵯峨天皇與二平城天皇一有レ隙。不レ穆。于レ時嵯峨天皇祈禱、有レ感。初奉二斎王一云々」

と、平城、嵯峨両帝の皇位争奪が原因とある。平城、嵯峨両帝は桓武天皇の皇子で、同腹（乙牟漏）の兄弟であるにもかかわらず、皇位継承の重大事になると、嵯峨天皇は自己本位の人間性を露出して、人為では不可能と考えた最後の術策として、神頼みの方法をとったものと思われ、賀茂明神に誓願の代償として、皇女有智子内親王を奉斎させたのが賀茂斎院の起原である。伊勢斎宮と同様の目的で、対象は異なっても、結局は人間の政治的野心遂行の手段としての目的行為である。斎宮（伊勢）、斎院（賀茂）ともに斎王と呼称された。斎王の定義は、「伊勢大神、賀茂明神に天皇の代理として天皇御一代の間奉仕する未婚の皇女の称で、原則として内親王が任ぜられ、適任者のない時は親王宣下のない女王が任ぜられる。」以上の伊勢、賀茂の斎王を同一に呼称する時、区別がつかない憂いがあるので、伊勢斎王は斎宮、賀茂斎王は斎院と呼称されるに至った。

右に述べた如く、従来は皇国の御祖である伊勢神宮のみに置かれた斎宮に準じて、嵯峨天皇の弘仁元年（八一〇）には賀茂斎院を置かれ、皇女有智子内親王をして奉斎させたことは、如何に賀茂明神への尊崇が他社を超えていたかが察せられる。爾来毎年賀茂祭と並行して、華麗な斎院の儀式、行列が行なわれたが、鎌倉時代になって国内混乱のた